

『広辞苑』の解説は、「明治維新以後の日本において、欧米列強のアジア侵略に対し、アジア諸国の連帯によって対抗しようとした思想及び運動。後には、アジアへの膨脹政策や大東亜共栄圏論と結びついた。」

12月28日付『毎日』の書評ページに、中島岳志著『アジア主義―その先の近代へ』を橋爪大三郎が評している。教えられることが多いから、引用させてもらう。

―玄洋社の頭山満、黒龍会の内田良平。宮崎滔天、北一輝、大川周明、南方熊楠、岡倉天心、田中智学、石原莞爾……と連なるアジア主義。植民地化に反対する各国ナショナリズムを起点としつつも、その制約を超える国際主義の運動だ。民衆運動と手を結びベラルな面と、日本帝国主義の先兵となる右翼的な面とを併せ持つ。その射程は政治・軍事・経済から文化・思想運動まで及ぶ。

―玄洋社は自由民権運動に起源を持ち、朝鮮の民主化運動を支援……アジア主義者たちは、中国の革命家を手助けし、インド独立の闘士を匿い、ロシア領内のイスラム教徒と連繫をはかる。ときに当局と対決し、ときに国策の手足となるなど……

―自由主義・社会主義・マルクス主義ら左派は日本の固有性を素通りする。対するアジア主義は日本に、西洋に対抗するアジア精神の精髓をみる。岡倉天心の不二元を、日蓮主義の田中智学は八紘一字を、三木清は西田哲学の多一論を、鈴木大拙は東洋的一を説いた。―アジア主義が日本の帝国主義的拡張に奉仕する……

まあ僕はこういう論説には歯が立たない。僕が憂慮しているのは、日米軍事同盟の強化に狂奔する一方で、中国や韓国や北朝鮮との関係を好転させようとの意志が安倍政権に見られないことだ。平和・協力・繁栄の東アジア共同体を構築できないか、という課題を真摯に追求していく道を、日本人は選ぶべきではないか。戦争中毒アメリカとの戦闘協力は亡国棄民の道にほかならない、このことを自覚する多数派を地域で育成しなければならぬ。

1月1日付『毎日』の「社説」は「戦後70年 日

本と東アジア」で、主張は「脱・序列思考のすすめ」。

明治以降、脱亜入欧で「欧米を手本に帝国主義・植民地主義による軍事大国となって無謀な戦争に突入し破滅……戦後は経済大国を目指し……アジアでトッブだという序列意識と自負心が日本の近現代史を支えてきた。……昨今の反中・嫌韓感情やヘイトスピーチ（憎悪表現）などにも、古い序列思考からくる他者否定の排他意識が潜んでいないか、自問自答してみるべきだ。……世界の真ん中で輝く日本（安倍首相）など……「大国残像ナショナリズム」を振りかざし、過去の栄光を取り戻すことではない。優越主義によるアジア観を排し、中国・韓国と共生できる地域の未来を考えながら、東アジアの和解と連帯に率先して取り組むことであろう」。良識の論説だ。

1月4日付「社説」は「戦後70年 歴史と政治」。主張は「自分史に閉じこもるな」。「戦後日本は……他国との争いを徹に慎み、一國平和主義から国際貢献の主体へと脱皮してきた。誇るべきはその歩みであり、戦前の歴史ではない」。歴史修正主義政権への凍としたり批判。惜しむらくは、憲法前文と第九条への言及がない。

東アジアの中の日本で、嫌韓・反中の感情を煽動しているのは、序列意識。日本至上主義もあるが、戦前戦中の歴史認識の歪曲・偽造に狂奔する右翼であり安倍政権なのだ。

1953年平和5原則、55年バンドン10原則、61年非同盟諸国首脳会議開催、67年東南アジア諸国連合ASEAN設立、76年紛争の平和的解決・武力不行使を謳う東南アジア友好協力条約調印、94年アセアン地域フォーラム発足、95年東南アジア非核地帯条約調印、2002年南シナ海行動宣言、2008年ASEAN憲章制定、2011年バリ原則宣言。

忘れてならないのは、この東アジア地域は、20世紀に世界で最多の生命が奪われたことだ。日本の植民地支配とアジア太平洋戦争で、2000万以上の人命が失われた。その後も、中国の内戦・独立戦争・朝鮮戦争・ヴェトナム戦争・そのほか国内の混乱や外国の干渉で1800万人が生命を失った。それゆえ、平和を希求する動きは熱烈であった。右に挙げた歩みはその証しである。

日本の役割は憲法9条の不再戦の誓いを貫徹することである。日米軍事同盟から離脱することである。